

北関東における剣術流派の伝播に関する研究

——上野国甘楽郡における馬庭念流について——

数馬 広二

一 はじめに

江戸時代末期、関東（上野国・下野国・上総国・下総国・安房国・常陸国・武蔵国・相模国）の農村において剣術流派が存在していたことについては、これまで渡邊一郎の研究を嚆矢に、多くの研究が積み上げられてきた。⁽¹⁾

本稿は、江戸時代の農民が、剣術を学び、修行していたことを農民の身体運動文化の一つとして位置づけ、馬庭念流の普及形態や門人階層について上野国甘楽郡を中心明らかにするものである。

馬庭念流は、始祖を相馬四郎義元（念阿弥慈恩 一三五〇～？）とし、樋口又七郎定次が慶長四年（一五九九）に中興して以来四〇〇年余り、上州に勢力を拡大した剣術流派で、現在の二十五世（樋口十郎右衛門定仁）まで群馬県多野郡吉井町馬庭の樋口家で継承される。

上野国甘楽郡域は、江戸から三十里（約一二〇km）、上野国西南部に位置し、信濃国佐久郡に隣接し、七日市藩領（一万石）、小幡藩領（一万石）、旗本領、および西牧領、南牧領、山中領とよばれる天領で成り立っていた。そしてこの地域は、中山道の脇往還である下仁田道（姫街道）や、信濃国への余地峠を結ぶ道沿いに集落が存在し、「砥石」、「菟薊」、信州米の流通、近江商人による上州絹の商取引で栄えた宿場町（下仁田町・一宮町・富岡町）があった。また庶民の信仰を集めた、一宮貫前神社、妙義神社、中之嶽神社が鎮座していた。

二 上野国甘楽郡での目録伝授

上野国甘楽郡における馬庭念流の門人分布をみるにあたって、はじめに有力門人に発給された「目録」の取得者についてみてみよう。寛保二年（一七四二）頃から安永四年（一七七五）までの甘楽郡

内の「目録」伝授者を抽出すると(『近代傳他家目録控』⁽²⁾)、以下の一五名(他地域を含めた総人数は三六名中)が記される。

寛保二年(一七四二)	君川村・茂木浅右衛門 一宮村・茂原嘉助
宝暦四年七月(一七五四)	星田村・佐藤平蔵 小幡村・吉田大八郎、松原郡太夫、 斎藤郡八郎、野田小兵衛
宝暦六年(一七五六)	岩崎村・鈴木久兵衛 一宮村・小林平吉
宝暦十三年(一七六三)	小幡藩・相川理左衛門
宝暦十四年(一七六四)	黒川村・高橋平左衛門 本宿村・神戸金左衛門
明和二年(一七六五)	七日市藩・前田求馬
安永四年(一七七五)	七日市藩・大里郁馬、横尾徳三郎

このうち、君川村・茂木浅右衛門へ十四世樋口定嵩^{ただか}妹が嫁いでいる(樋口家文書「系図」⁽³⁾)ことからして、茂木浅右衛門は、相当の技術を有したか、経済力を有した門人であったと考えられる。そのほかの目録取得者については、起請文などから入門年が確定できる者が七名いる。(表Ⅰ)

(表Ⅰ)

所在・姓名	入門年	目録取得年	授与者	経過年数
一宮村・茂原嘉助	(一七四二)	一七四二	樋口定張	〇
一宮村・小林平吉	一七四三	一七五六	樋口定嵩	十三
小幡藩・相川理左衛門	一七二四	一七六三	樋口定嵩	三九
黒川村・高橋平左衛門	一七五三	一七六四	樋口定嵩	十一
本宿村・神戸金左衛門	一七三七	一七六四	樋口定嵩	二七
七日市藩・前田求馬	一七六三	一七六五	樋口定嵩か	二
七日市藩・横尾徳三郎	一七七四	一七七五	樋口定嵩か	一

目録取得までの修行年月については、茂原嘉助を例外として、「目録取得に十年以上の修行を重ねた入門者」四名と、「二年以内で得た七日市藩士」二名の例が対照的である。とくに前者の例は、一八世紀半ばの馬庭念流における目録の取得が、いかに難しかったかを示す。

三 上野国甘楽郡内の門人分布

樋口家文書⁽³⁾を参考に作成した表Ⅱは、一七一〇年～一八六七年までの約一五〇年間の甘楽郡内の馬庭念流門人、および一八三〇年以降の奉納額活動に対する寄付者を加えた計一、八一〇名の地域分布であり、十年区切りで表した。なお、目録および目代、免許取得があった年代には(■)で囲み、右に人数を集計した。

そして門人分布図Ⅰを作成した。

その特徴を挙げてみると、

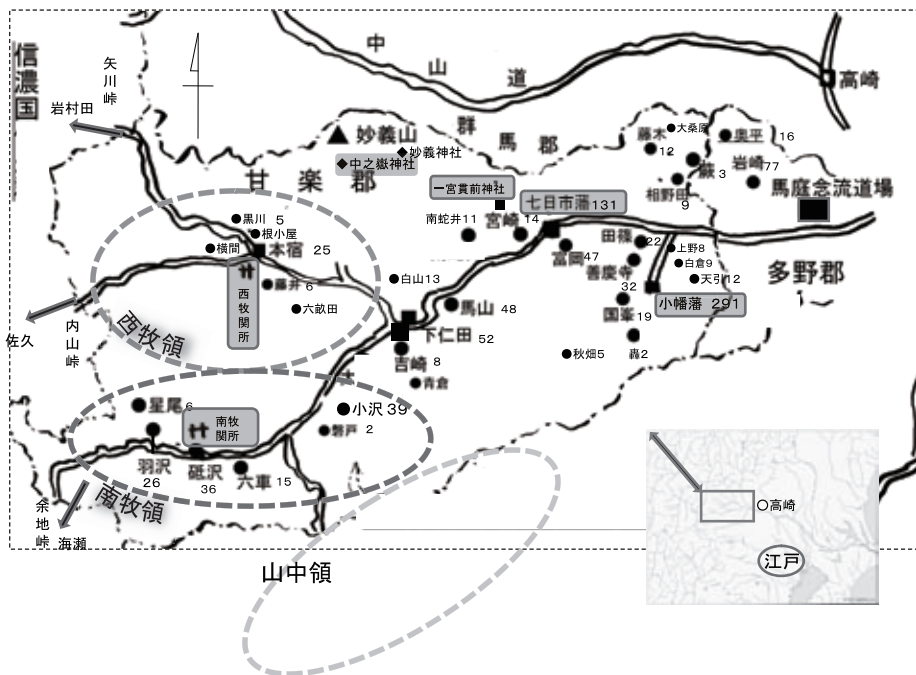
①甘楽郡(山中領を除いて)内の七八村と二藩で入門者あるいは寄

表Ⅱ 上野国甘楽郡の入門動向（馬庭念流）

NO	区分	合計 人数	村名・西暦	1710-	20-	30-	40-	50-	60-	70-	80-	90-	1800-	10-	20-	30-	40-	50-	60-	目録	目代	免許	区分
1	A	131	七日市藩			23	13	9	19	26	12	9	2		6	9		3		17	3	2	A
2	B 七日市藩領	79	岡本				12		13	9	15	11	6	13									B
3		77	岩崎	12	12		19		1	5	13	3			7	1		4		3			B
4		55	野上				15	11	4		12	7		5	1								B
5		38	君川		24			1		1			1			11				1			B
6		19	藤木						1					2		11	3	2		3			B
7		18	高尾								1			1		4	4	8		1			B
8		16	奥平		10			3			2			1									B
9		13	小桑原						1				4			2	4	2		1			B
10		12	曾木						1	9						1	1			1			B
11		9	相野田						1	1						5	1	1					B
12		8	黒岩									3				5				1			B
13		7	下野上									7											B
14		7	七日市				1	3								2		1		1			B
15		4	大桑原														3	1		1			B
16	C	291	小幡藩		22	6	1	6	34	1	32	20	7	27	84	39	5	7		30	3		C
17	D 小幡藩領	48	小幡村				9	6		7		1	6	1	2	8		3	5	3			D
18		32	善慶寺				8				11	3	3	7									D
19		27	黒川	18				5			2						2						D
20		22	田篠	21												1							D
21		15	下小坂		15																		D
22		13	中小坂							13													D
23		13	福島			4	1		5				2			1							D
24		12	天引		6				1		1	1					2	1		3			D
25		10	後箇												2	3		5		1			D
26		9	宇田										1	2		4	2						D
27		9	白倉							2	1						4	2		2			D
28		8	星田						6		1	1											D
29		3	蕨							3													D
30		2	小坂													2							D
31		2	轟							1						1							D
32	E 西牧領	63	馬山					21		4	19					15	4			1			E
33		59	下仁田					1			13	17	1		8	8	8	3		3			E
34		34	本宿	14		5	3	1	2		9									1			E
35		27	坂詰		11				1		5					1	9						E
36		20	上馬山					3			17												E
37		15	根小屋		3	3							1		2	6							E
38		13	白山					6							3	4				3			E
39		8	藤井					1	1		6												E
40		5	西牧黒川		5																		E
41		3	横間					3															E
42		3	六畝田						1		2												E
43		1	大平													1							E
44		1	西牧森平								1												E
45	F 南牧領	39	小沢													33	6			1			F
46		36	砥沢					15			14					6			1				F
47		26	羽沢					1			15					7			3				F
48		15	六車					1	13	1													F
49		8	大日向													8							F
50		6	大仁田						6														F
51		6	星尾								6												F
52		2	岩戸													2							F
53		2	檜平													2							F
54		1	塩沢													1							F
55		1	南牧													1							F

NO	区分	合計 人数	村名・西暦	1710-	20-	30-	40-	50-	60-	70-	80-	90-	1800-	10-	20-	30-	40-	50-	60-	目録	目代	免許	区分
56	G藩と旗本相給	5	下丹生										3			2							G
57		4	高瀬							1					2	1							G
58		2	上高瀬								2												G
59		2	下高瀬											2									G
60	H旗本	16	宮崎					2	9		1					2	1	1					H
61		8	上野							2	2				1	3							H
62		5	秋畑					1			1	3											H
63		4	造石													3	1						H
64		3	笹														1	2					H
65	I旗本相給	52	富岡町（上町・中町含む）				3	5			3	7	8	5	10	9	2			2			I
66		16	富岡瀬下町		16																		I
67		6	富岡下町		6																		I
68		1	内匠											1									I
69	J幕府／旗本／寛永寺	93	一宮（村・町）	27			12	3			16	3		7	5	13	7			5	1		J
70		83	一宮上町						1			2		1		79				2			J
71		24	一宮下町		24																		J
72		22	国峯				6		1	1		12	1			1							J
73		20	妙義							3	9	7				1				1			J
74		11	南蛇井						1	4	1					5							J
75		8	多井戸							7								1					J
76		8	庭谷												2	2	4						J
77		8	吉崎								7				1								J
78		3	大牛								3												J
79		1	大栗								1												J
80	不明	2	新屋				2																不明
1810																				88	7	2	

図I 上野国甘楽郡の馬庭念流門人分布



付者が確認される。

- ②一七一〇年以降、馬庭村の近村（岩崎 君川）、南牧領本宿村、小幡藩領黒川、田篠、小幡藩、七日市藩からの入門が確認される。
- ③中山道脇往還の宿場として栄えた富岡町、下仁田町などや、信州との国境域で、関所のある西牧領本宿村、南牧領砥沢村付近でも一七二〇年代から入門がある。

- ④一八世紀に門人が存在した地域の多くで、一九世紀以降も門人が継続して存在した。

すなわち一九世紀以降に頻繁に行われた江戸幕府による在村剣術取締の下にあっても、一八世紀以来の甘楽郡での馬庭念流門人は着実に広がっていたことになる。その広がりの特徴を領地支配の点からみてみよう。

四 甘楽郡の領地支配と門人のひろがり

なぜ、農村域で門人が広がったかについて、支配との関係からみてみよう。ここでは甘楽郡内で馬庭念流門人が所在した村々の支配と門人人数（一）を以下に分類をした。この分類は、寛文八年（一六六八）『上野国郷帳』および、その後の変遷も含め分類し、甘楽郡に属する「山中領」の門人を除いたものである。

- A 【七日市藩】 七日市藩（129）
- B 【七日市藩領】 岡本（79） 野上（55） 下野上（7）

C 【小幡藩】

君川（38） 高尾（18） 相野田（9）
黒岩（8） 七日市（村・町）7 曾木（12）
大桑原（4） 小桑原（13） 奥平（16）
岩崎（77） 藤木（19）

D 【小幡藩領】

小幡藩（288）
中小坂（13） 下小坂（15） 小坂（2）

E 【西牧領】

横間（3） 下仁田（59） 下馬山（1）
上馬山（20） 馬山（63） 白山（13）
本宿（34） 六瀬田（2） 根小屋村（15）
大平（1） 坂詰（27） 森平（1）
西牧黒川（5） 藤井（8）

F 【南牧領】

羽沢（26） 磐戸（2） 小沢（39） 星尾（6）
大仁田（6） 大日向（8） 砥沢（36）
六車（15） 檜平（2） 南牧（1）

G 【藩と旗本の相給】 下高瀬（2） ※小幡藩・吉井藩・旗本3氏

下丹生（5） ※小幡藩・旗本1氏
高瀬（4） ※小幡藩・吉井藩 旗本3氏
上高瀬（2） ※小幡藩・吉井藩 旗本1氏
下高瀬（2） ※小幡藩・吉井藩 旗本3氏

多井戸^{おおいど} (7) ※吉井藩から旗本へ

H 【旗本1氏による支配】宮崎^{みやざき} (16) 笹^{ささ} (3) 秋畑^{あきはた} (5)

上野^{うの} (5) 造石^{つくろいし} (3)

I 【旗本2氏以上の相給支配】

富岡^{とみおか} (上・下・中・瀬下) 町 (74)

内匠^{たくみ} (1) ※元禄より旗本3氏。

J 【幕府領・旗本領・寛永寺領】

一ノ宮^{いちのみや} (村・町200) 国峯^{くにみね} (22) 吉崎^{よしか} (8)

庭谷^{にわや} (8)

南蛇井^{なんだま} (11) ※元禄より幕府領。

多井戸^{たいう} (8) ※幕府領

大牛^{おおうし} (3) ※幕府領 大栗^{おおくり} (1) ※幕府領

妙義町^{みょうぎ} (20) ※幕府領から寛永寺領へ

このように、支配の仕組みは十種類に分けられる。すなわち江戸を防衛するという軍事的目的から江戸幕府直轄地(天領)であった「西牧領」「南牧領」をはじめ、「七日市藩領」「小幡藩領」、「七日市藩」、「小幡藩」、「藩と旗本の相給」、「複数の旗本相給」という支配地において門人が存在していた。

とくに支配が複数に及ぶ「相給地」では治安維持が難しく、警察権が名主に委ねられ剣術流派が生まれる温床があった。⁽⁵⁾ 上野国甘楽郡においても旗本は地域の有力農民に「地方役人」を委嘱しており、役人を委嘱された農民にとって武芸教習の必要があったと考えられる。

その事例を、西牧領、南牧領の門人にみてみよう。

五 西牧領本宿村・神戸金左衛門の目録取得

西牧領・本宿村の名主、「西牧関所」^{さいもくせきしよ}の関守も勤めた神戸金左衛門^{かんべきんざえ}家は、北条家臣・伊勢孫十郎の由緒をもち、伊勢国神戸から移住し「久保金(くぼきん)」「まるもと」と呼ばれ、商業、酒造業、金融業で拡大した家である。⁽⁷⁾ 馬庭念流門弟としては、正徳四年(一七一四)入門の本宿村名主・神戸左門^{かんべさもん}が初出であり、その後、元文二年(一七三七)、神戸忠次郎(金左衛門重堅)が一八才で入門。二七年後の宝暦一四年(一七六四)に樋口定嵩^{ひぐちさだたか}から「目録」を授与されている。忠次郎は、明和四年(一七六七)に病氣を理由に名主を退任し、翌五年、忠次郎息子の文之助が二九才で没したので、神戸良八(金左衛門重照。幼名文吉)が本宿村名主となり、この年、馬庭念流にも入門した。

本宿村の馬庭念流入門者は一七八三年まで確認できるが、良八が没し、一七九一年に神戸家が名主職、関所番職を失って以降、門人が確認されない。その理由は、神戸家と馬庭念流の関係の深さを意味するのであろうか。

その神戸家は、天保年間に信濃国田野口藩へ百両を無利子で貸与⁽⁸⁾したり、安政五年(一八五八)に金左衛門重根が名主に復帰したとき、信州米が不足し、村民が困窮することに備え米百俵を備蓄(囲い米)するなどの経済力を持っていた。のち元治元年の下仁田戦争

の際、水戸浪士・武田耕雲斎の宿泊を引き受けた。

名主へ復帰し、「西牧十四ヶ村・改革組合村惣代」となった神戸金左衛門へ、慶應二年（一八六六）正月に、「関東取締出役」三名から左記の達しがあつた。

「剣術師範のもの、組合村之内、有^レ之分、

流名^並名前、今日中、可^か書出^{だすべきこと}一事

（慶應二年）

寅正月五日

関東取締出役

宮内左右平

木村越藏

洪谷鷲藏

（神戸金貴家文書）^⑩

西牧領に、剣術指南の者がいた場合、流派と名前を差し出すべしと通達された覚え書きである。しかし、神戸家より関東取締出役に報告をした記録が見つからない。この通達は、関東取締出役が、有力名主へ治安を任せる手薄な統治体制では、農村における剣術流派の一掃は不可能だったことを示す。なお神戸家には槍、長刀、刀などの武器があつたが太平洋戦争時に供出したという。

六 南牧領砥沢村、羽沢村の市川氏入門

下仁田道から余地峠越えの道筋にあたる砥沢村には「南牧関所」

七

が置かれ、馬庭念流門人の市川四郎兵衛と市川五郎兵衛両家は、この関守であつた、市川四郎兵衛は、馬庭念流に宝暦六年（二七五六）入門し、目録を得ている。その後、市川五郎兵衛真純が、天明五年（二七八五）に入門した。

市川家は、先祖市川右馬介が武田家家臣で、戦功により「月剣」という十文字槍を拝領した。南牧領での市川家は、永禄年間（一五五八～一五七〇）、市川四郎兵衛が、主家小幡信定の落城のため砥沢村に、譜代家臣五〇名を引き連れて住んだことに始まる。市川家は砥沢（市川本家）、羽沢（市川分家）、塩沢（市川分家）に住み、このうち、砥沢の市川家は文禄二年（一五九三）、家康からの朱印状をもとに砥山を経営。上野御藏砥（砥沢砥）を請負い、「砥沢—下仁田—富岡—藤岡—江戸」というルートで江戸へ砥石を輸送した。ルート上にある村々は農間余業として潤ったが、馬庭念流門人高橋平右衛門（黒川村から入門・明和七年）、松浦三左衛門（天保三年伊勢奉額に寄付門人・寛政四年入門）が「砥石商」で収益を上げた。^⑪

羽沢の市川家出身の市川五郎兵衛は、寛永年間（一六二四～一六四四）、信州佐久郡で新田開発し「五郎兵衛新田」と名付けられた。馬庭念流が佐久郡で門人基盤を獲得する上でも、仲立ちをしたと考えられる。寛文五年（一六六五）に関守を仰せつかつており、関守としての「武」を必要としたので、馬庭念流に入門したと考えられる。

七 南牧領小沢村・関喜藤太の稽古

南牧領甘葉郡小沢村で馬庭念流目録を取得した関喜藤太は、小沢村名主家で、寛政八年筆写『取締申教方請書帳（百姓心得方条々）』に、「百姓之子供並若いもの等劍術・弓術を好み、朝暮身を入り習い候もの有レ之由二候得とも、右は武家の職分にて……」⁽⁶⁾という禁制の筆写を持ちながらも、その名主みずからが馬庭念流を学んだ。関喜藤太は天保二年、次のような『劔術秘傳』を著した。内容は馬庭念流の目録にあたる「表五本」の覚え書きである。



(丁)

（表紙裏）天保二卯年
五月
関喜藤太精一

(表紙) 劔術秘傳



是ハ切立きりたてる 劍術方かた覚

表五本

「壹本目」

術曰 志ないを互いに取りて、跡江去り、いっそく壹足に立ち、右足先に出し、真に中（ちゆう）にかまひ、又左を出し、又右足を出し、又左足踏み込み、切る也。○壹足二足出し、三足目に切る也
右に出し壹足

「式本目」

壹足に立ち、左足を跡へ引き、下段に構え、又左壹足又右壹
 足又左ふみ込みて切る也。右足ヲ出し、壹足に立つ

○壹足 二足 三足

(以下略)¹⁴

本来は「口伝」であるところの、馬庭念流のかた・「表五本」の運足が覚え書き形式で記されている。すなわち「一本目」「二本目」「三本目」「四本目」「五本目」「切送り」「切落し」「三段切」が解説され、そののちにも「表五本」の「受太刀」の運足が解説されている。「志ない」は「袋撓」のことを指すのであろう。現在は木剣で表五本の形を行う。そして、この覚え書きによって天保年間当時の馬庭念流の動きが再現できる。

小沢村は、馬庭村から稽古に通うのも遠い距離であったので、道場を建設し、ここで稽古を行っていた。最近まで道場があったという（市川太平洋氏談）。関家は、伊勢国亀山城主・関長門守一政（亀山城在位一六〇〇～一六一〇）の系譜を持ち、帰農したとはいえず、武を磨く矜持をもっていたのであろう。

このほか南牧領には、「六車^{むくるま}村に道場があつた。幕末期荒廃する農村において、南牧領の村々では馬庭念流が、むらの青年教育をねらいとして行われてもいたのでは」（市川太平氏談）と考えられている。

次に七日市藩・小幡藩の門人についてみてみよう。

八 七日市藩士・樋口十郎右衛門としての剣術指導

入門帳によれば、十八世紀初め、十三世・樋口将定^(一六六六)（一七五一）から始まり、一四世・定嵩^(一七五二)、十五世・定広^(一七五三)、一六世・定雄^(一七五四)、一七世定輝^(一七五五)、一八世定伊^(一七五六)までが七日市藩前田家で指導したと考えられる。

そのほかに『樋口家系図』⁽¹⁵⁾によれば、樋口定雄（号・貫斎）江戸の前田家屋敷に仕え、定雄の長男定保（十左衛門）、定保の長男定詣（信六郎）が前田家に仕えたところ。また樋口家には、七日市藩（前田大和守利轄）家老・保坂茂左衛門^(一七五七)が、七日市藩の門人九名の氏名を記した「卷子」（表題無し）、および前田丹後守内門人一三五名が記された『姓名書』（一冊）がある。

七日市藩剣術師範としての樋口氏の動向については、『寛政三年御用日記』（保坂家文書）に記載がある。

・（寛政三年）正月十三日 雨天

「樋口十郎右衛門隠居英翁^(定嵩)、御機嫌伺罷出候二付、兼々、御門入被^{あそばされ}遊度、思召候二付、今日御門入被^{あそばされ}遊、御書付被^{くだされ}下、御料理並御目録金三百疋被^{くだされ}下也」

ここでは寛政三年（一七九一）に七日市藩主前田利以^(としもち)のもとへ樋口十郎右衛門定嵩（隠居して英翁）が正月の伺候の際に藩主利以は、かねてよりの希望であった入門を叶えたことが記されている。

その後、天保五年七月二〇日に前田鉾七郎利愛（花押）が入門の際、樋口貫斎へ起請文を認めている⁽¹⁶⁾。

さらには『天保十四年日記 大坂御加番雁木御小屋』⁽¹⁷⁾によれば、一八四三年、大坂城の「御加番」にあった前田利轄^(としあきら)に樋口十郎右衛門（定伊）が同道したのであるうか、樋口十郎右衛門（定伊）が指導したことがわかる。

・（天保十四）八月二十四日 雨天

「樋口十郎右衛門参、劔術稽古有^レ之」

また馬庭道場の稽古初め（この頃は一月十七日）に七日市藩士の桜井新蔵（馬庭念流「目録」）が出席したことはつぎのように「常例」であった。

・（天保十三年）一月十七日⁽¹⁸⁾

馬庭樋口十郎右衛門稽古初、常例二付、小頭新蔵^(桜井新蔵) 外二足軽式人 乍二年始罷越事

すなわち樋口将定以来の宗家が七日市藩で指導し、七日市藩士となったことで、馬庭道場へ七日市藩士らが足を運び、剣を通じた交流を農民と行う場となったのである。

つぎに、樋口定伊^(さだい)が七日市藩士であったことで、念流の普及活動に大きな利便が生じた例をみてみよう。

九 伊勢神宮奉額活動に対する七日市藩先触

天保三年（一八三二）、馬庭念流が伊勢神宮へ門人姓名額を奉納する際、七日市藩家老・保坂茂左衛門より道中「先触」の発給を許された。これは道場主・樋口定伊が七日市藩士（給人格・三人扶持）という立場にあつてこそ受けられた便宜であり、通行経費削減などのメリットを流派にもたらした。

大里家『日記』によると、伊勢神宮へ向かうため、二月十二日に樋口定伊一行が馬庭を出立した。松井田で一泊。碓氷峠を登り、追分（長野県軽井沢町）で一泊。十四日には長久保宿（長野県小県郡長和町長久保）和田宿（長野県小県郡長和町中町）へ宿泊し、下諏訪（長野県諏訪市）までの中山道の行程では、各宿場で人馬（「人足二人」と「継馬二疋」）を七日市藩名で融通してもらえらることとなった。額が大きく、馬を使つての運搬であつたとみられる。下諏訪からの脇往還に入ると、この先触は有効ではなくなり、「相對頼み」という個人交渉に成らざるを得ないものであつた。

・二月十一日 天気

一 今日先触御渡被下、左之通

「覚」

人足 式人

継馬 式疋

右者、明十二日 爰許差立、松井田泊、翌十三日追

分泊、同十四日 長窪泊にて、下諏訪迄差越候。駅々人馬無滞、差出可給候。

二月十二日 御右内

従 上州松井田

中山道和田駅迄 駅、問屋中

猶、以此書面、駅、無滞、順達、和田駅に留置、樋口十郎右衛門判物、相越候ハバ、可被相渡一候 已上。

下諏訪より脇往還江相成、此処は自分相對頼ニテ通行可致候由。

（大里家文書）

また、尾張国・宮駅から四日市（泊）―津（泊）―松坂（泊）を経て伊勢国山田（三重県伊勢市・外宮周辺）まで、人馬（「人足二人」と「継馬二疋」）を調達を受けた。なお荷札荷印は「鍬形ニ付式ツ、外二槍印三ツ」という七日市藩公用の印が押された。すなわち、馬庭念流宗家樋口十郎右衛門は、「前田大和守内 樋口十郎右衛門」としての顔を持つことで、自流の奉額活動を順調に遂行できたのであろう。

「覚」

人足 式人

継馬 式疋

右者 今 爰許^(二)出立 四日市泊、津泊、松坂泊ニテ勢州山田迄、相越候、駅々人馬無^レ滞、差出可^レ給候^(三) 以上

月日書入べき事

尾州 宮駅より

前田大和守内

樋口十郎右衛門 印

從勢州桑名 参宮道小俣迄

宿々 問屋中

猶、以^二此書面^一、宿々順達、小俣ニ留置、拙者相越候ハバ右之通、出来にて、御年寄中より御渡ニ相成

一 荷札荷印、鍬形ニ付式ツ、外ニ槍印三ツ、右ノ通、取揃、御先触被^二一諸ニ致^一、差出事。

(大里家文書)

十 七日市藩よりの歳暮

七日市藩家老・保坂伊織は、「組之者」すなわち七日市藩士が樋口十郎右衛門（定伊）から指導を受けていることへの御礼と、歳暮（旧臘）が何かの不幸で出来なかつたので翌年二月朔日に金百疋を差し出したことを認めた。⁽²⁰⁾ 藩剣術指南役への心遣いが表れている。

樋口十郎右衛門様

前田大和守内 保坂伊織

以^二手紙^一、致^二啓上^一候。春寒之砌、弥、無^二御障^一、珍重存候。然ば、去年中、組之者、御世話ニ相成候ニ付、旧臘^(陰曆二月)可^レ致^二進入^一候処、御忘中ニ付、此節目録之通、金百疋致^二進入^一候。此段、以^レ得^ルニ御意^一、如^レ斯御座候 以上。

二月朔日

(樋口家文書)

つぎに小幡藩についてみてみよう。

十一 小幡藩への指導

小幡藩からは馬庭念流への入門は、享保十年（一七二四）から幕末に至るまで確認される。

嘉永元年（一八四八）十一月、馬庭念流目代の小幡藩士津田左門勝利（のち目代となる。明治元年 年寄格・五四石四人扶持）から十八世宗家・樋口十郎右衛門定伊に宛てられた書簡⁽²¹⁾では、藩主松平玄蕃頭^(文久二年二月没)が馬庭念流の目録伝授をご希望である旨を伝え、面会して相談したいと伝えている。

樋口十郎右衛門様

津田左門

向寒之節、弥、御安泰珍重、御儀ニ奉レ存候。――(略)――
 將又、玄蕃頭様御儀、御傳受御受被レ成度、思召候段、被ニ仰出候、
 此段、御達申候。右ニ付ては、御用意、御日合等の儀、御打合申
 度候間、一寸御咄、御面語申上ゲ度ク奉レ存候。此段申上度、如
 此御座候。猶、拝眉之節、萬々可ニ申上候、以上。

(十一)
 霜月二五日

津田左門

(樋口家文書)

この書簡が功を奏し望みが叶ったのか、翌月の嘉永元年(一八四
 八)十二月、松平玄蕃頭から馬庭念流「矢留」の印可を受けたこと
 へ誓約が残される。

覚

今度、念流印可之内、矢留之伝授在之上は、
 聊、致、他言他見、間敷候事
 依之、一札如此
 嘉永元年戊申年十二月

樋口十郎右衛門殿

松平玄蕃頭 忠(花押)

(樋口家文書)

このように、馬庭念流・樋口家は七日市藩、小幡藩の二つの藩で
 指導していたことになり、次の問題が生じることになった。

十二 中嶽武尊神社奉額姓名の順列の配慮について

天保十一年(一八四〇)四月に中之嶽武尊神社(群馬県甘楽郡下
 仁田町大字上小坂)へ馬庭念流が奉納した額の姓名順をめぐる一件
 である。

中之嶽神社は、欽明天皇(在位五三九―五七一年)の代に妙形氏
 が社殿を建立。寿永二年三月(一一八三年)藤原祐胤卿が神剣を奉
 斎。江戸時代の元和二年(一六一六年)、加藤長清(道士)が中興
 して神器を守り奉斎し、小幡藩主織田筑前守信久が社殿を改築、中
 之嶽奉行を設け地所を寄進した。小幡藩の鎮守社として奉斎され、
 織田家、松平家の崇敬も篤かった。

まず天保十年(一八三九)、中嶽の巖高寺豊壽から寺社奉行へ奉
 額の許可願いが認められ、上小坂村の村役人もこれを推進した。

「以三書付一奉願上候」

長崎弥左衛門様御知行所、當国馬庭村ニ罷在、劔術師範仕候
 樋口十郎右衛門儀、當山武尊権現江、年来宿願ニ付、来ル子三
 月中、太々神楽、奉納仕、其節、於ニ

神前、劔術修業仕ル、惣門弟姓名、額面ニ相記、奉納仕度旨、
 申談御座候。尤、當山ニ村方、聊も故障之儀、無御座候ニ付、
 宿願為ニ相果候様、被ニ仰付、被ニ下置度、奉願上候。
 右願之通、被ニ仰付、被ニ下置候ハバ、難有仕合奉存候
 以上。

天保十^(一八三九)亥年十月二十七日

上小坂村

巖高寺 豊壽

寺社

御役所

前書巖高寺豊壽、奉^二願上^一候通、被^二仰付^一、被^二下置^一候様、
一同奉^二願上^一候 以上

村役人

(樋口家文書)

翌天保十一年三月、奉納が遂行され、その後四月、再び中嶽に登
山し、門弟姓名額を奉納することとなったときの一件がつぎに示さ
れる。

中嶽は天領(寺社領 御朱印地)であるという理由から、一面の
姓名額を神社へ掲げるに当たっては、樋口十郎右衛門が指導してい
る七日市藩と小幡藩両方の順列をつけることはバランスがとれな
い。道場世話人の四名が知恵を絞り、額を二面用意し、一面には七
日市藩、一面には小幡藩の藩士の名を記し、村々の門人は小幡藩士
の次列に記すことにしたという。七日市藩士樋口十郎右衛門の立場
を考えての門人の賢明な配慮であったといえる。なおここに記され
る瀧上半兵衛は小幡藩士(文化十三年三月二十日入門)である。

「乍^レ恐奉^二歎願^一候口上覚⁽²³⁾

念流剣術馬庭稽古所行司^並世話役之者共。

惣代小嶋藤兵衛外三人一同、奉^二申上^一候者、此度甘楽郡中

嶽 武尊大権現社^江太々神楽^{ならびに}並奉納剣術額面納候儀、相催

先達て世話役惣代を以て奉納候処、奉納剣術式之儀は

可^二執行^一之趣、被^二仰下^一、因^レ茲^{こゝにより}、本月二四日就^二吉辰^一、於

馬庭 奉納剣術之儀式、執行、同二六日中嶽^江登山^{つかまつり}仕、太々

神楽^{これをけんらくとう}献^{はたま}之候。将又、今般、姓名額面仕立方之儀^二付、奉^二歎

願^一候は、師匠十郎右衛門先代々より

御家^江御出入仕、是迄段々、奉^レ蒙^二御厚恩^一、冥加至極難^レ

有仕合^二奉^レ存、姓名額面列順之儀、前々額面相納候節、

不^レ巨^二異論^一、

御家御藩中様御姓名最初^二相認、夫より諸家方、姓名相記来り

候。然^レル処、此の度之儀は、松平玄蕃様御家中被^レ致^二願発^一

殊^二中嶽は彼ノ御領分之儀^二御座候得バ、列順如何共決兼、同

役共、相^{あひま}拳^{あひま}師匠^江相伺申候ても、一同相談之上、宜様可^二相計^一

と被^二申聞^一、甚以て当惑至極仕、認方差控罷在候。依^レ之、

無^レ抛、一同、相談仕、奉^二願上^一候は、此度額式面出来仕候^二付、

一面^江御家御藩中様御姓名始^二相認、一面は玄蕃頭様御家

中姓名相認、夫より、諸家相認、無^二甲乙^一、相^{あひま}計申度、奉^レ

存候。尤も、以来奉納御座候節は、先規之通^二可^レ仕候間、何

卒、御賢考被^レ下、御聞届御許容被^二成下^一候^{ハバ}、一同難^レ有仕

合^二奉^レ存候 以上

〔八四〇〕
天保十一年子四月

馬庭稽古所 新井新五郎（印）

世話役惣代兼

瀧上半兵衛 （印）

同 増尾三右衛門（印）

行司 小嶋藤兵衛 （印）

〔十代 前田利徳〕
前田淳八郎様

御役人衆中

（樋口家文書）

つぎに一宮貫前神社宮司との関係についてみてみよう。

十三 一宮貫前神社へ額の奉納と貫前神社社人

一宮貫前神社は群馬県富岡市一ノ宮に鎮座し、御祭神は「経津主神」（ふつぬしのかみ）と「姫大神」（ひめおかみ）で、五三一年の創建とされる。武田信玄・勝頼父子、小田原北条氏、徳川家ら武家の信仰が篤く、現在の社殿は三代将軍徳川家光公の命によって建立。一宮貫前神社に参詣する民衆が増えるなか、馬庭念流十五代樋口定輝は、文化十年（一八一三）四月十八日に、大額（縦138cm×横181・5cm 2007年春、貫前神社が発見・確認）を奉納した。この事業で定輝は、本式神楽を依頼し、お祓いを受け、神社境内で剣術形を披露し、費用が二十三両二朱銭七貫三百文であった。^{〔26〕}

一宮社役人の竹内式部は、馬庭念流門人の竹内一角の子か。竹内大炊や「神主家」の尾崎兵庫（光明）もこの事業執行に協力をした。^{〔26〕}

「覚」

一金拾五両 本式御神楽御奉金

一三貫文 神前積銭

一貳貫五百文 同 積米料

一金四両 御額料

一同三両 御祓御祝儀金

一六百元 徒士 式人

一四百年 仲間式人

一八百年 警固四人

一南鐐壹斤 竹内大炊

一金貳百疋 尾崎兵庫

一同貳百疋 竹内式部

都合金貳拾三両貳朱銭七貫三百文也

右者^は 御神楽御奉納金^並 御祝儀ノ通、^{たしか} 慥^二請取、夫、^{たしか} 致^三配

當^一候、以上

一宮社役人

竹内式部

文化十四年四月十八日

樋口十郎右衛門殿

御稽古場・御世話人衆中

(樋口家文書)

門人帳に記載される一宮神社の社人の名前をみてみよう。⁽²⁷⁾

- ① 一宮主水物部氏春 貫前神社の大宮司家
- ② 一宮図書 茂正 弘化四年(一八四七)二月十日没。
- ③ 一宮神太郎^{じんたろう} 貫前神社大宮司家嫡子の名前
- ④ 一宮中務 茂正 貫前神社の大宮司家「目録」(「劔道・画・狂歌」義澄 号は浅白庵 または芽一園)
- ⑤ 小幡隆輔 贈馴(「劔道・盆景」儔桂 皇阪楼と号した)
- ⑥ 尾崎大内蔵 氏賢 貫前神社神主家「目録」
- ⑦ 竹内一角 在原業常。箕輪城主長野業政の姻戚家。一宮家の社家。元治元年六月二十二日没。
- ⑧ 館主殿 貫前神社「祝部」^{はふりべ}の家。

一宮上町の門人名をみると「吉村」「田嶋」「峯岸」「山本」姓が多く、貫前神社の社家である。また「高橋」姓は尾崎家の駕籠を守る侍であつたと伝えられている(貫前神社小林氏による)。

また、天保三年(一八三二)馬庭念流が伊勢内宮へ額を奉納するにあたり、一宮上町では「尾崎大内蔵世話」において寄付金が集められた。差し出した者は「竹内一角」「井上嘉兵衛」「永井捨五郎」「丸山廣吉」「吉村造酒」「吉村平吉」「吉村林八」「原茂兵衛」「工

藤播次郎」「今井政次郎」「秋元伊兵衛」「住川善四郎」「新井弥兵衛」「須田銀蔵」「清水百万兵衛」「田嶋太兵衛」「富田茂三郎」「堀久次郎」「俣田源兵衛」「茂木金蔵」「鈴木直八」「鈴木直八」「鈴木又八」であり、殆どが一宮社人であつたと考えられる。社家尾崎家は貫前神社鎮座以来の旧家であるという伝承をもち、大宮司の一宮家とともに二家で神社運営に携わつた。尾崎家のみ「一宮御師」として手代を抱え、上野国内で配札を行つた。

関東における社人の剣術流派入門については、御嶽山御師、大山御師、榛名山御師などの例があるが、尾崎家の場合も一宮貫前神社の檀徒獲得という意図があつたのかもしれない。

以上、七日市藩、小幡藩、一宮社人と馬庭念流樋口十郎右衛門との関係を見てきた。さて、江戸出張道場の経営が困難になつた際に甘楽郡内で資金を援助した者がいた。

十四 甘楽郡内よりの資金援助

文化三年(一八〇六)、樋口十郎兵衛は、門人・目代の佐藤善司^{さとうぜんじ}を「請人」として、甘楽町小幡村の新井京助^{あらいきょうすけ}(一七七九～一八三五)から金十五両の援助を要請した。

「借用申金子之事」⁽²⁸⁾

一金 拾五両

右者、江戸表出張稽古場入用旁、無_レ扱、安用_二付、借用申候処、実正_二御座候。此金返済之儀者、来_ル霜月^(十一月)中、金貳拾兩_二毫分之利_ヲ加へ、元利、無_二間違_一、急度、御返上可_レ申候。萬一、其節相済兼申候_{ハバ}、請人引請、所持之畑売払、急度御勘定可_レ申候。為_二後証_一、仍而如_レ件。

馬庭村

借用人

樋口十郎兵衛

同所

請人

佐藤善司

(一八〇〇)
文化三寅年七月

新井京助 殿

(新井家文書)

新井京助家は、小幡藩「御用達」として藩へ資金援助を行う資産家、「小幡藩領内世話役頭取兼大庄屋」であつた。このころ赤岩村(群馬県吾妻郡六合村大字赤岩)湯本氏からも借用しており、馬庭念流江戸道場経営が厳しくなつていつたと考えられる。

その後、弘化期、上野国甘楽郡では有力門人の山口藤十郎(馬庭念流・目代)が、江戸道場経営に成功した千葉周作の「撃剣(しな)い打ち込み試合稽古」に影響を受け、学心一刀流を創始する動きに出る。上野国でこうした動きの起こる前、江戸道場の衰勢は、武芸を学ぼうとする上州門人に、少なからず思考の変化をもたらして

いたのであろう。

十五 甘楽郡の門人

最後に本調査で判明した甘楽郡の門人について、門人の身分、武器の存在などをみてみる。

○小幡藩

①高橋吉三郎 文政四年(一八二二)一二月入門。目録取得。

○富岡町

①一万田玄達(一八〇八―一八八〇)。天保一〇年の中嶽奉額時に寄付金。医師。如水ともいう。もと柳川藩士。父一万田玄能は本宿村(下仁田町)で医師。天保年間に富岡中町に住み医業の傍ら寺子屋を開いた。勤王家で国学者。『続日本書紀十首』『古稀祝詞集』を編んだ。

○一宮村・町

- ①茂原嘉助 嘉助を襲名。寛保二年一二月入門の嘉助、天明五年正月入門の嘉助はそれぞれ「目録」を得た。
- ②茂木邦太郎 天明五年正月九日入門。父武左衛門は天明九年頃、旗本・恒岡源兵衛の「地方役」(『島高堅日記』による)。
- ③笠原太兵衛 一宮仲町「商人宿」として文政十年「諸国道中商人鑑」に記載。⁽²⁹⁾
- ④新井十右衛門 『文政八乙酉仲冬吉辰 上野下野武蔵下総 当时諸家人名録』⁽³⁰⁾には「好剣道 盆景 美山 号本白亭」とある。

⑤ 山口藤十郎勝則（一八〇八） 馬庭念流「目代」。学心流創始者。

⑥ 山口藤十郎勝政（一八二八～一八八六） 初代山口藤十郎勝則の創始した学心流を継ぐ。「山口藤四郎勝政（号百葉軒）」。

⑦ 鈴木忠五郎 「目録」。「一笑 号竹林斎 盆景 盆画 生花」。

○宮崎村

鈴木家 「一加部家 二佐羽家 三鈴木家」といわれた上州の富豪。

○藤木村

① 白石栄三⁽³¹⁾ 藤木村名主。「質屋渡世」。七日市藩の「御用達役」であり、天保二年の寄付を馬庭念流に行っている。

② 新藤仁右衛門⁽³²⁾ 馬庭念流目代。藤木村組頭。「質屋渡世」

③ 新藤耕太郎⁽³³⁾ 馬庭念流目録。藤木の新藤家は、「源頼朝配下。源氏滅亡後に藤木桑原に住。農業。戦国期は武田信玄配下の郷土」とされる。

○星尾村

① 石井大助⁽³⁴⁾ 神主。天保十年寄付。

○下仁田村

① 有賀善五郎⁽³⁵⁾ 秀元（一八一七～一八七二）か。文政一二年頃入門。生糸商。農業の傍ら生糸製品に「天下一」と名付け海外輸出。

② 桜井弥五兵衛⁽³⁶⁾ 麻荷主商人。安永十年に本家から分家独立し、幕末期にかけて本家をしのぐ財を蓄積した人物。

○本宿村

① 一万田和佐吉⁽³⁷⁾ 天明三年（一七八三）入門。医師・一万田玄能のこことか。息子一万田玄達は富岡で医師。

② 神戸左門・金左衛門（前出）

○下小坂村（下仁田町）

① 里見安左衛門⁽³⁸⁾ 享保七年三月入門。下小坂村名主。里見家は、新田義重三男義俊が上野国碓氷郡里見村に住み里見太郎と称し、その後室町期に弥兵衛尉義光が甘楽郡小坂村に住居して祖となった。里見哲夫家か。

○馬山村

① 岩井市左衛門・岩井万之助⁽³⁹⁾ 農業。中世武士系譜の言い伝えと、槍などの武器があったと伝えられる。岩井甲吉家。

○吉崎村（下仁田町）

① 桜井吉太郎⁽⁴⁰⁾ 天明六年（一七八六）に、桜井家4名が入門。現当主桜井重久氏によると、小幡氏が祖。脇差し三振り保管。

○天引村（甘楽町）

① 森平彦右衛門⁽⁴¹⁾ 享保十三年入門。天引村名主。

② 森平友右衛門孝始⁽⁴²⁾ 一八五〇年神田明神奉額の際、兼三郎・辰五郎とともに、馬庭念流「目録」として寄付している。明治期、蚕糸業を営んだ森平喜十郎一家か？

○小幡村

① 松井嘉十郎⁽⁴³⁾ 「小幡藩郷中軽卒」

○羽沢村(南牧村)

- ①市川四郎兵衛 宝暦六年(一七五六)五月三日入門。武田支配下の武士団として「生島足島神社蔵起請文」に「永禄十永禄十年八月七日 南牧衆 市河四郎兵衛与吉」が記される。⁽⁴²⁾
- ②市川五郎兵衛真純 天明五年四月九日入門。羽沢村名主。砥沢関所守。南牧衆の一人として信濃国佐久に五郎兵衛新田を開発した市川四郎兵衛真吉家。巻物が現存。市川彦太郎範士は羽沢市川家の一家の出身。

- ③市川五郎兵衛源真信 嘉永三年の神田明神奉納額寄付名簿に記載。真信の四男は上大塚村(藤岡市)名主で五一か村の大惣代となった折茂健吾(一八二七)。⁽⁴³⁾

- ④市川(河)邦之丞源真甫 嘉永三年の神田明神奉納額寄付名簿に記載

○砥沢村

- ①市川四郎兵衛 上野砥の請負。

○六車村(南牧村)

- ①浅川和助⁽⁴⁴⁾ 天保七年六月六日七三才没の浅川伊之助か。六車村の浅川家敷地内には道場があった。浅川定次家には伝来の刀があった。(浅川定次氏談)

○小沢村(南牧村)

- ①関喜藤太⁽⁴⁵⁾ 伊勢国亀山城主・関長門守一政(亀山城在位一六〇〇〜一六一〇)の系譜を持つ。関家から百^ト下手の田村家脇には四間四方の剣道場があったが、昭和時代に取り壊された。

- ②斎藤貞八郎⁽⁴⁶⁾ 『養蚕世話方諸事雑録』(明治四年)に「蚕種製造追願人」と記される。

○横間村(下仁田町)

- ①瀧本院 樋口家蔵文書のうち「大先達 瀧本院」とある文書には、吉野の大峰山(奈良県 1,719^ト)の山開きに関する内容が記されている。大峰修験の先達であったと思われる。

○上野村(甘楽町)

- ①田中孫三郎 新田義重十九代の田中孫右衛門蔵人が祖。

代々名主。文化十四年に上州実蠟製方、天保十三年割元名主。名字帯刀を許され小幡藩の中小姓役となる。(群馬県姓氏家系大辞典)

十六 まとめ

- ①江戸時代、馬庭念流^{まにわねりゅう}の門人が、上野国甘楽郡^{こうずけ かんら}で、ある下仁田^{しもにた}道(姫街道)や、信濃国への余地峠を結ぶ道沿いに、78村域と七日市藩士(前田家)、小幡藩士(織田家 松平家)に確認された。

- ②藩士以外の門人階層は、「関守」、「僧」、「医師」、「農民」などであった。

- ③中世武士の系譜をもちつつ帰農し「武」を忘れない、といったよな家柄(神戸家は北条家臣・伊勢孫十郎の由緒、市川家は小幡家・武田家臣、小沢家は関長門守一政の系譜をもつ)が甘楽郡に

おける馬庭念流門人の中核をなした。

④馬庭念流門人で関所守の神戸金左衛門家や市川家は、信濃国佐久郡への新田開発や藩への献金も行っていた。このことは馬庭念流が信濃国佐久郡への門人を拡大する上での糸口となったと考えられる。

⑤砥石、蒟蒻、信州米の流通および近江商人による上州絹の商取引等で栄えた宿場町（下仁田町・一宮町・富岡町）では、馬庭念流門人であった市川家・高橋平右衛門・松浦三左衛門が馬庭念流を通じてネットワークをもとに商取引を行っていたと考えられる。

⑥馬庭念流宗家・樋口十郎右衛門定伊は、七日市藩士という身分によって伊勢神宮奉納の「先触」を得て交通上の特権に恵まれた。馬庭念流が行った他所への奉額活動もまた、藩から何らかの支援を受けていた可能性がある。

⑦上野国甘楽郡内で馬庭念流は、一宮貫前神社いちのみやぬきまき、妙義神社みょうぎ、中之嶽神社なかのたけへの門人姓名額を奉納し、広報活動につとめていた。

⑧馬庭念流道場の鏡開きに小幡藩士が出向いて稽古をした。馬庭の宗家道場は、道場で学ぶ農民と藩士が少なからず接する場でもあった。江戸社会においての馬庭念流道場は、身分制度を越えるコミュニティーを形成する機能をも有した「場」であったとも言えるのではないか。

⑨山間に位置する、南牧領（小沢村と六車村）や西牧領で道場の存在が確認された。馬庭村から遠隔にあって、目録クラスの有力門人が指導していたと考えられる。農村での剣術稽古が奨励された

理由を考えると、自衛手段という目的のほかに、「子弟教育」の手段として馬庭念流が期待されたのではないか。この辺りのことは、今後の課題とする。

謝辞

本研究の遂行にあたってつぎのかたがたにご指導とご協力を頂きました。

樋口松枝様、馬庭念流二五世樋口定仁様、南牧村市川太平様、南牧村教育長市川文三郎様、南牧村黒龍卯山不動寺長岡良圓様、南牧村浅川定次様、富岡市今井政夫様、富岡市茂木仁太郎様、下仁田町教育委員会文化財保護係・大河原順次郎様、下仁田町神戸金貴様、甘楽町教育委員会増田剛久様、一宮貫前神社宮司小林富士夫様、瀬宜茂木琢様。なお翻刻は渡邊一郎先生にご指導いただきました。心より御礼申し上げます。

【注】

- (1) 渡邊一郎『幕末関東剣術英名録の研究』(一九六五 渡辺書店氏)を嚆矢に、山本邦夫氏、大保木輝雄氏、中村民雄氏、榎本鐘司氏、長尾進氏・高橋敏氏らの先行研究がある。数馬広二の調査報告として「北関東における武術流派の伝播に関する研究(2)」(上野国多胡郡を中心とした馬庭念流門人について)、「日本武道学会第三六回大会発表抄録」、および「北関東における武術流派の伝播に関する研究(3)」(上野国・武蔵国境界域の剣術流派について)、「日本武道学会第三七回大会発表抄録」がある。

- (2) 樋口松枝家文書
(3) 樋口松枝家文書

なお今回分析した樋口家文書は、つぎの21冊である。

- ・享保二与門弟入覚帳(一七二七〜一七三六)
- ・従宝曆五門弟入帳(一七五五〜一七六五)
- ・従明和三年門弟入帳(一七六六〜一七七五)
- ・従安永五年門入帳(一七七六〜一七八四)
- ・従天明五已年門弟帳(一七八五〜一七九四)
- ・従寛政六門弟帳(一七九四〜一八〇五)
- ・従文化二年門弟帳(一八〇五〜一八一九)
- ・従文政三門弟帳(一八二〇〜一八三五)
- ・摩利支尊天寄進 寛政十一年(一七九九)
- ・山名村八幡宮額奉納惣姓名帳 天保二年三月二七日(一八三一)
- ・伊勢内宮額奉納惣姓名帳 天保七年三月(一八三六)
- ・中嶽剣術奉納惣姓名簿 天保十年二月(一八三九)
- ・白雲山奉納額惣姓名寄帳 弘化三年三月(一八四六)
- ・碓氷嶺奉納再興額惣姓名帳 弘化四年三月(一八四七)
- ・榛名山額面再興姓名帳 嘉永二年四月一日(一八四九)
- ・上毛八幡村八幡宮奉納剣術惣姓名帳 嘉永三年(一八五〇)
- ・神田明神奉納惣姓名帳 嘉永三年七月(一八五〇)
- ・讃州象頭山奉納姓名帳 嘉永七年五月(一八五四)
- ・象頭山奉納姓名簿 安政二年二月(一八五五)
- ・相州鎌倉八幡宮奉納惣姓名帳 安政四年正月(一八五七)
- ・日光奉納惣姓名簿 元治元年九月(一八六四)

- (4) 『角川日本地名大辞典10 群馬県』第五版(角川書店)を参考にした。
- (5) 渡邊一郎『幕末関東剣術英名録の研究』一九六五 渡辺書店
- (6) 南牧村小沢・関弘芳家文書
- (7) 神戸金史、神戸金貴『はるかなる父と母の物語』二〇〇五年による。
- (8) 『佐久市志 歴史編(三) 近世』一九九二年 佐久市志編集委員会
- (9) 一〇四六頁 天保一四年一二月田野口藩窮乏の「御用達」に「上州の米問屋 神戸金左衛門」が「金百両」を無利子で貸し出している。
- (10) 関東取締出役研究会編『関東取締出役―シンポジウムの記録』二〇〇五年 岩田書院
- (11) 下仁田町本宿・神戸金貴家文書
- (12) 市川育英家文書「文化十年二月 甘楽郡南牧関所守市川家由緒書」
- (13) 『群馬県史資料 編9』P805 資料五〇五
- (14) 『富岡市史 近世 通史編 宗教編』富岡市史編さん委員会
- (15) 一九九一年 P345「表18 砥山請負人と富岡砥問屋」
- (16) 『佐久市志 歴史編(三) 近世』一九九二年 佐久市志編集委員会
- (17) P46 市川五郎兵衛が元和年間に五郎兵衛新田(浅科村)を開いた。
- (18) 群馬県南牧村小沢 関弘芳家
- (19) 樋口松枝家文書 写 群馬県立文書館蔵
- (20) 大里家文書・群馬県立文書館蔵
- (21) 大里家文書「日記」(群馬県立文書館 F P 8 8 0 2 - 7)によると、二月十二日に馬庭を出立。
- (22) 樋口松枝家文書
- (23) 樋口松枝家文書
- (24) 中之嶽神社ホームページを参考。
- (25) 樋口松枝家文書
- (26) 樋口松枝家文書
- (27) 『尾崎家略』『尾崎忠夫家文書解題』(群馬県立文書館収蔵文書目録
- (28) 22 甘楽富岡地区諸家文書(1)二〇〇四年 群馬県立文書館発行
- (29) 一宮御師については『ぐんまの古文書 解説編(下)』一九九九年
- (30) 群馬県立文書館 P280 資料二〇二二(元治元年八月 一宮貫前神社の
- (31) 手代奉公人請状(B)を参考。

- (27) 『西上州社家許状 一宮関係抜粋』（一宮貫前神社資料）
 および 『文政八乙酉仲冬吉辰 上野下野武蔵下総 当時諸家人名録』
 （催集 隣柳斎山楽梓）（文政五年三月発注 文政八年十一月梓上 上
 州前橋徳沢 一徳斎峻澤）を参考。
 新井吉十郎家文書（群馬県立文書館 53 1 3 1）
 (28) 萩原進編『諸国道中商人鑑』 みやま文庫
 (29) 『文政八乙酉仲冬吉辰 上野下野武蔵下総 当時諸家人名録』
 (30) 白石栄三郎については『群馬県史 資料編9』P 648
 (31) 『群馬県史 資料編9』P 678（天保9年甘楽郡藤木村質屋書上帳）
 (32) 『群馬県史 資料編9』P 678（天保9年甘楽郡藤木村質屋書上帳）
 (33) 『群馬県史 資料編9』P 678（天保9年甘楽郡藤木村質屋書上帳）
 (34) 『星尾村 宗門人別帳』群馬県立文書館蔵
 (35) 『群馬県史 資料編9』P 678（天保9年甘楽郡藤木村質屋書上帳）
 (36) 井上定幸「近世西上州における麻荷主の経営動向―下仁田町桜井家史
 料の紹介と若干の考察」『近世の北関東と商品流通』所収 二〇〇四
 岩田書院
 (37) 『群馬県史 資料編9』P 77に小幡藩家中「郷中軽卒」として記され
 る。
 (38) 『群馬県史 資料編9』P 77に小幡藩家中「郷中軽卒」として記され
 る。
 (39) 桜井家へ訪問取材。
 (40) 岩井家へ電話取材。
 (41) 『群馬県史 資料編9』P 77に小幡藩家中「郷中軽卒」として記され
 る。
 (42) 森芳子「西上野における武田氏支配体制の展開―生島足島神社蔵起請
 文を中心として―」『群馬県史研究』第二十六号
 (43) 『多野藤岡地方誌 各説編』多野藤岡地方誌編さん委員会編集・発行
 一九七六 P 157に折茂健吾と市川五郎兵衛家の由緒が記される。
 (44) 浅川定次氏訪問取材。市川太平氏とともに墓地も調査。
 (45) 関弘芳家へ訪問取材。
 (46) 斎藤貞八郎については『群馬県史 資料編9』P 487
 樋口松枝家文書

【参考文献】

- (1) 『下仁田町史』下仁田町史刊行会 吉永得像 一九七一年
 (2) 『南牧村誌』南牧村誌編さん委員会（群馬県甘楽郡南牧村）一九八一年
 (3) 『甘楽町史』（群馬県甘楽郡甘楽町）甘楽町史編さん委員会 一九七九年

(4) (5) (6) (7) (8)

『甘楽史観 郷土の花影』一九三四年 矢嶋太八
 『甘楽町の文化財』甘楽町教育委員会 一九九五年
 『西毛文化』富岡甘楽文化振興協会機関誌 Vol.14 14 二〇〇六年
 佐藤興平『群馬県砥沢金山の解明』南牧村郷土研究会 二〇〇四年
 『明治三二年当時の下仁田町商店街地図写し』全国営業便覧発行所よ
 りのコピー。